入場無料

◆◇◆◇◆◇◆◇蘆花生誕１４０年記念◆◇◆◇◆◇◆◇

蘆花著作略解題

１『如温武雷土』

明治二十二年初版民友社刊の明治二十三年第三版。定価十五銭。英国の政治家ジョン・ブライトの伝記。再版あたりから付せられたものか、巻頭に色違いの紙で「本書に関する各新聞雑誌の批評」を載せ、続いて「ジョンブライト氏」の肖像を口絵とし、更に蘇峰の序を付す。「徳富健次郎纂訳」とあるように、英語文献をもとに蘆花がまとめたものと思われる。

２『グラツドストン傳』

明治二十五年、民友社刊。初版。定価二十銭。巻頭の「例言」によれば、「英國新政府の印度事務次官ヂォルヂラッセル氏の新著グラツドストン傳を本とし、スミス氏の虞氏傳、エチマツカルシー氏の「グラツドストン治下の英國」ジョスチンマツカルシー氏の「現代史」其他數種の書籍新聞雑誌を參酌して譯述したるもの」という。

３『トルストイ』

明治三十年、民友社刊。初版。定価二十五銭。「十二文豪」シリーズの第十巻。ロシアの文豪トルストイの評伝。巻頭の例言において蘆花自身が記すように、彼がトルストイの熱烈な信奉者であったことは、よく知られている。本書刊行の九年後には、ロシアにトルストイを訪問するにいたる。

＊　　＊

４『青山白雲』

明治三十一年、民友社刊。初版。定価二十五銭。「漁師の娘」以下九編を収める、蘆花初めての文芸小品集。巻頭に蘆花の自序を置く。

５『不如帰』

明治三十三年初版民友社刊の明治三十九年第六十五版。定価三十五銭。蘆花の小説の代表作の一つ。これも『自然と人生』同様、奥付によりその売れ行きの様が窺われる。非常に質素な装幀であるが、口絵として黒田清輝の絵の写真が収められている。

６『不如帰』

昭和十一年刊行の岩波書店版の初版。定価一円八十銭。はじめに民友社から発行されたのが、明治三十三年。この民友社版はおそるべき売れ行きを示し、明治四十二年には百版をかぞえ、それを記念し蘆花が巻頭言を寄せている。今日入手しやすい岩波文庫版にも、本書にもこの巻頭言が収録されている。

さて、この岩波書店版は、愛子跋文「定本不如帰を出すに当りて」に記されるように、蘆花没後十周年を記念し、既に絶版となっていた民友社版の新装版、かつ「定本」として企画されたものである。この「定本」編集にあたっては、第百版を骨子として、その直前の第九十九版、および初版は当然ながら、可能な限りの版を集め参照し、更には初出の「国民新聞」まで当たりなおしたという。

愛子による献呈識語あり。

7『不如帰画譜』

明治四十四年、左久良書房刊。初版。定価一円五十銭。中澤弘光の編画装幀。表紙には四色版、口絵および本文挿絵六葉は多色刷りの木版画で装った豪華本。それ以外にも、本文には一頁おきに一、二色刷りの木版挿絵をもちいるという凝りようである。ただし『不如帰』本文はダイジェストであり、通読して筋を追うようには作られていない。また、底本に用いたテキストについても何ら説明はない。

中澤弘光は油彩・水彩を得意とした画家で、黒田清輝に師事していた。文学者との関わりも深く、与謝野晶子の本の装幀などもしている。

8『自然と人生』

明治三十三年初版民友社刊の大正十年二百六十版。定価五十銭。今日の文庫本と同版型。蘆花の代表作の一つで、小説「灰燼」、自然をテーマとする散文詩的随筆「自然に対する五分時」「写生帖」「湘南雑筆」、評論「風景画家コロオ」から成る。『自然と人生』はこの民友社版が最初の版だが、本書の奥付を見ると、明治四十二年には百版を数え、大正十年時点でも一月十日に二百三十五版、九月一日には二百四十九版、そして数日おきに版を重ね、本書の発行された九月二十二日に二百六十版に到るという、おそるべき売れ行きを示したことが知られる。

9『青蘆集』

明治三十五年、民友社刊。初版。定価二十五銭。「五分時の夢」以下十二編の小品を収める。

10『黒い眼と茶色の目』

大正三年、新橋堂刊。初版。定価一円二十銭。一種の告白小説で、愛子との結婚前における或る女性との失恋記録である。巻頭には本分とは色違いのセピアインクで妻への献辞が掲げられている。その献辞の表現を用いるならば、「おまへに此生でめぐり合ふ前に、おまえを尋ねてさんざ盲動をした」その記録ということになろう。

＊　　＊

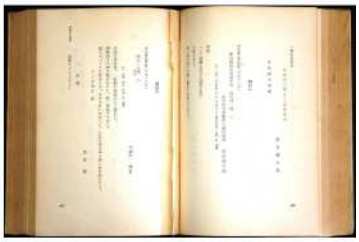
11『書翰十年』（甲）

昭和十年、岩波書店刊。初版。定価三円八十銭。徳冨愛子編。成立の経緯については、「あとがき」にふれるように、全集刊行後、全集に漏れた書簡を編集したもの。全集には大正六年までの書簡が収められており、本書は大正七年から昭和二年までの十年間の書簡をまとめたもの。なお、「補遺」として全集にもれた明治三十年以降の書簡をも収録する。「補遺」に大正七年以降の書簡が含まれていることから、一旦、本編が編集され順次印刷に回される中で、新たに見いだされた書簡が、この「補遺」に収められるという経緯をたどったものかと思われる。

後に記す（乙）（丙）の両本に比して、頁の削除のない完全版。当該の頁の内容を検するに、いずれも大逆事件にかかわる発言が、官憲の忌諱に触れたものと知られる。検閲の眼をくぐり抜けた貴重な本である。

12『書翰十年』（乙）

基本的な書誌事項は（甲）本と同じ。「本編」の四九一頁、四九二頁、及び「補遺」編の九六五頁、九六六頁が抜け落ちている。これが落丁でないことは、（丙）本から判る。おそらく、初版のうち製本以前の状態で残されていた一冊であろう。その段階で検閲により上記頁が問題となり、該当箇所を削除してから製本に回したものと思しい。本の喉（綴じ目部分）を子細に見ても、製本後に頁を削除した形跡は見いだせない。



13『書翰十年』（丙）

基本的な書誌事項は（甲）本と同じ。見返し紙に「左記頁削除／四九一頁－四九二頁／九六五頁－九六六頁」と印刷した小紙片を貼付。当該の頁は、ハサミで切り取られた痕が生々しい。

14『蘆花家信』

昭和十年、岩波書店刊。初版。定価二円二十銭。徳冨愛子編。明治二十八年から大正四年までの、夫妻の間の私信をまとめたもの。

15『徳冨健次郎日記』

昭和十一年、岩波書店刊。初版。定価八円。徳冨愛子編。「あとがき」によれば、蘆花の十回忌を記念しての刊行で、大正三年の五月から六月までの二ヶ月分を、蘆花の筆跡そのままに影印してある。限定三百五十部のうち、本書は第三百四号。愛子署名入り。

＊　　＊

16『早稲田文学』創刊号

明治三十九年一月刊。定価二十銭。二頁完結の掌編「余が犯せる殺人罪」を掲載。目次には、島村抱月、薄田泣菫、小川未明、饗庭篁村、坪内逍遙といった、当時の錚々たる顔ぶれが並んでいる。

17『國民之友』第參百六拾四號

明治三十年十二月刊。定価十五銭。小説「河島大尉」（續）、「トルストイ傳補遺」（續）を掲載。